

各位

党派を超えて国家的課題を追求する

公益財団法人協和協会 時代を刷新する会

両団体会長代行 岸 信夫
両団体理事長 半田 晴久
環境技術委員長 坂本 忠彦
専務理事兼事務局長 清原 淳平

環境技術委員会のお知らせ (第338回)

日時 平成29年7月20日(木) 午後1時半～4時

場所 参議院議員会館 地下1階 B102会議室

千代田区永田町2-2-1

◆国会議事堂前駅(丸の内線・千代田線)①番出口より5分、永田町駅(有楽町線・半蔵門線)①番出口より下車2分。当日、午後1時より、議員会館玄関にて、通行証を差し上げます。その時刻前に到着された方は、恐縮ですが、受付脇のロビーにてお待ち下さい。会議開始後にお越しの方は、受付に「B102会議室に行きたい」旨お伝え下されば、お迎えに参ります。

議題 1、「環境問題について、昨今、思うこと」

挨拶 坂本忠彦環境技術委員長

2、

解説

3、『環境技術関連ニュース NO.162』

解説 中島稔科学技術部会長

報告 去る6月20日開催の第337回環境技術委員会は、坂本忠彦委員長が議長を務め行われました。

まず、坂本委員長より、「環境問題について、昨今、思うこと」と題して開会挨拶がありました。アメリカがパリ協定からの離脱を宣言した。実際には様々な手続きがあり、完全脱退には4年程かかるとのことだが、CO2排出量1位のアメリカが抜け、今後は2位の中国がイニシアティブをとるとみられるが、今後パリ協定の行方はどうなるか懸念される。さて、今回のテーマは河川環境問題だが、私が建設省に在籍していた当時、九頭竜川の中州に樹木が生え、問題となっていた。

そこで伐採することになったが、鶉の生息地であることが判明し、環境団体から抗議を受けた。治水と環境とどちらを優先するかは難しいところである。

次に、今村史子日本工営(株)中央研究所グループリーダーより、「河川の樹林化の現状と今後」について解説がありました。日本の河川は下流域が短く、中流域が長いという特異な構造である。したがって、日本の河川の問題は、日本固有の問題と考えて取り組むべきことが多い。例えば、長良川を例に挙げると、昭和30年代には河原が広がっていたが、平成10年ごろから外来種のもともとは法面の砂防対策として植生された草が茂りだし、平成21年には中州で樹林が生い茂り、草に覆われて河原がなくなり、樹木の面積はおよそ3,40年で1.8倍にも面積が広がった。なぜこうなったのかは諸説紛々で川によって理由は異なるが、一例をあげると、治水が成功したことにより、洪水の頻度が減った。本来、洪水が起きて草木が流されれば樹林化することはないが、悪環境に強い外来種が土を固め、樹木が育ちやすい環境をつくる。こうして強い樹木が育つと、大洪水が起きた時に流されると、橋脚に引っかかって被害をもたらす危険性もある。また、周辺の富栄養化も挙げられる。ある川では、3年で森林化した事例もある。対策としては、やってみなければわからない面もあるが、例えば人工的に洪水を起こして草木を押し流し、別の草を植えて植生を変えてしまうのも一手だ。いずれにせよ、流域住民との協働したプロジェクトで、定期的に草の伐採をするなどの対策が必要だ。

中島稔科学技術部会長より、『環境技術関連ニュース No. 161』の解説がありました。今回は、○自動車から排出される酸化鉄が温暖化にかかわっていることが判明。○トランプ大統領、6月1日にパリ協定脱退を正式表明。○CO₂の25倍の温室効果があるといわれるメタンの濃度が過去最高に。○人口一人当たりのCO₂排出量、1位アメリカ、2位韓国。このような状態でパリ協定の離脱を表明したことから、国際社会の反発は強まっている。○21世紀は、太陽の活動が低下するとの予測で、寒冷化するのでは、との説。○樹脂でろ過して下水処理速度を5倍にする技術、などの解説があり、一同大いに勉強になりました。

★レクチュアにつき、当日会費 会員千円、非会員三千円にご協力を。

次回、7月20日(木)の環境技術委員会に

出・欠 (いずれかに○印)

御芳名 _____

貴方様のFAX _____

テロ対策への警備からの要請上、会員に限ります。
新規参加希望者は、予め履歴書をご提出ください。

事務局宛FAX 03-3507-8587

公益財団法人協和協会 03-3581-1192 時代を刷新する会 03-3272-4320

[ホームページ](http://www.kyowakyokai.or.jp) <http://www.kyowakyokai.or.jp> [Eメール](mailto:shigeta@jidaisassin.jp) shigeta@jidaisassin.jp